送別における「送」と「別」——高適送別詩論考

松原　朗

盛唐期は、離別詩が十分に成熟を逐げた時期である。その前提には、初唐後期における離別詩の送別詩と留別詩への分化があった。

六朝時代の後半期には、離別詩は多くの作品數を集めて、すでに成熟した文學の主題となった。しかし當時の離別詩には、送別と留別との區別が十分に明確ではなかった。このことは詩題にも反映されていて、「別～」「贈～別」等の命題の下に送別詩も留別詩も作られ、作品によっては、詩題のみならず、詩の本體においても、その區別の困難なものも多く存在していた。——送別と留別の區分が確立した盛唐以降の基準をもってすればなお未成熟な段階にあるこの六朝期の離別詩は、しかし觀點を變えれば、送別と留別との十分すぎる程に卽物的な位置關係を超えて、離別において互いに等質の感慨（離別の悲哀）を共有することに主要な眼目をおく、獨自の主張を持つ樣式だったとも言えるのである。

この情況に變化が起こるのが、初唐四傑の一人、王勃においてである。[1] 王勃は「送序」という新たな文體を創出する。これは送別の文宴で、列席者に對して一律に送別詩の制作を促すこと趣旨とする、機能的文體である。この「送序」の出現は、離別詩に二つの新しい局面をもたらしたと言えるだろう。第一に、送別詩の制作數そのものの飛躍的增大。第二に、送別詩の多作化は送別詩の樣式化を促し、結果としてその反面に、送別詩から區別された留別詩の樣式化を促したことである。——六朝期までの送別と留別との區別を持たない離別詩は、ここを端緒に、送別詩と留別詩に明瞭に分化するのである。

初唐後期に出現した、この送別詩と留別詩との分化は、自ずと、兩者の命題方法の差別化にも反映されることになる。盛唐以降、送別詩の代表的な命題は「送」「送別」また「餞」となり、留別詩のそれは「留別」として整理されることになる。

＊「留別」という命題そのものは、初唐の末期に成立している。「留別」の語が最も早く離別詩の命題に用いられた作例として、次の三首が擧げられる。宋之問「留別之望舍弟」、崔融「留別杜審言并呈洛中舊遊」、張循之「婺州留別鄧使君」。――いずれが最初か判斷の決め手はないが、晩くとも則天武后在位の末期には命題として成立していた（張循之の沒年は武后朝にある）。なお「留別」が安定した命題として成熟するのは、孟浩然が五首の「留別～」と題する詩を殘した前後である。(2)

もっとも送別詩と留別詩との分化を承け、留別詩に對して「留別」という命題法が確立されるまでの過渡的な一時期（初唐末期）に、送別の詩の「送」に對して、留別の詩を專ら「別」の命題で稱することが行われた。またその影響の及ぶところ、盛唐期以後も「別」の命題は、主に留別詩の命題として繼承されることになった。

しかし盛唐期において、「別」の命題を送別にも用いる詩人が、例外的に存在している。その例外の代表格が、張說であり、おくれては高適である。しかも彼らにおいて「別～」系の命題は、送別と留別との未分化の六朝的情況をたんに消極的に引きずるのではなく、むしろ一定の表現意圖の下に、送別の詩に積極的に活用されていた。本稿では、この「別～」の命題が特に送別の場において用いられた作品に注目して、「送」と「別」とに如何なる相違であるのかを檢討することにしたい。

なお送別の「別～」詩を考察するためには、一方の「送～」詩との對比が不可缺である。そこで順序として、「送～」詩の特徵についての簡單な確認から始めることにする。

（一）「送～」詩の特徵　張說

在野の詩人、王勃によって端緒に就いた「送～」詩の量産は、宮廷の文學にも閒もなく波及する。盛唐初期を代表する臺閣の詩人は、張說であり、彼において「送～」詩は確實に宮廷文學の一員として根を下ろすことになる。

張說は、官人が地方に赴任するときを捉えて、多くの送別の詩を作っている。彼の送行する官人は、必ずしも彼と對等の關係にある友人ではなく、むしろ大部分は、上官と下僚と

の關係の中で、下僚を勵まして送行するものである。張説が、科擧派官僚の頭目として積極的に後進を提拔したことは知られるが（代表は嶺南の產である張九齡）、離別の場における詩文（送別詩）を介した交流は、彼が扶植した人際關係を確認する重要な機會でもあったに相違ない。

張説の「送～」を命題とする二七題（二九首）の詩題を、以下に示す。なお～～線は、被送者の目的地・目的行爲を記す部分である。

①奉和聖製送宇文融安輯戸口應制
②送郭大夫元振再使吐蕃
③送李侍郎迥秀薛長史季咏同賦得水字
④送王光庭
⑤新都南亭送郭元振盧崇道
⑥送尹補闕元凱琴歌（公善琴）
⑦送考功武員外學士使嵩山署舍利塔
⑧奉和聖製送金城公主適西蕃應制
⑨送鄭大夫惟忠從公主入蕃
⑩送崔二長史日知赴潞州
⑪同賀八送兗公赴荊州
⑫送王晙自羽林赴永昌令
⑬送任御史江南發糧以賑河北百姓
⑭送王尚一嚴嶷二侍御赴司馬都督軍
⑮送李問政河北簡兵
⑯送岳州李十從軍桂州
⑰嶺南送使
⑱奉和聖製送王晙巡邊應制
⑲送蘇合頌
⑳送喬安邑備
㉑送趙二尚書彥昭北伐
㉒南中送北使二首
㉓送趙順直郎中赴安西副大都督
㉔送宋休遠之蜀任
㉕送梁知微渡海東
㉖嶺南送使二首
㉗送梁六自洞庭山作

以上の「送～」詩の最たる特徵は、多くの詩題中に被送者の目的地、あるいは目的行爲を具體的に書き込んでいることである。六朝期の離別詩は言うまでもなく、直前の四傑の

「送～」詩の場合でも、これらが詩題に明記されることは必ずしも大勢ではなかった。

詩は當時、假に個人の閒で取り交わされたもであっても、第三者に公開されることを前提としていたことは、このさい注意を要する。假に離別という精神の事件そのものを主題とし、離別の哀傷を純粹に取り出して表白することに關心を向ける作品であれば、雙方の當事者にとって、目的地點や目的行爲の明示は不必要なものである。しかも第三者である讀者に對しても、このことは主題の在處を曖昧にしかねない蛇足となるだろう。それにも拘わらず、張說があえてこの點を明記していることは、要するに、離別そのものを主題とするのではなく、被送者の行旅の目的を第三者に知らしめること自體に、「送～」詩制作の主要な意圖が置かれていたことを示唆している。

張說が送行した者の大部分は、任務に赴く官人である。張說の「送～」詩によって彼の名と官歷は書き留められ、文學のすぐれた傳播力に乘って彼の話題は、當の離筵の場のみならず、廣く官界に知られることになる。被送者は、そのような送別の詩を贈られたいと願い、張說はそのように歡迎される詩を贈ることによって、被送者との閒に人際關係を扶植するのである。[3]――送別の詩が作られる文宴とは、その確かな一面として、このような世俗的計算の交錯する場でもあった。

ところで上記の「送～」詩で、官人の公務を帶びての旅立ちを送行する作は、①②③⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉖の二二首であり、しかもその大部分は國都における制作と考えられる。すなわち張說の「送～」詩は、ⓐ中央（國都）において、ⓑ官人の赴任を送行するものが大勢を占める。比喩的な言い方をすれば、皇帝の地方に赴任する臣下に對する配慮を「代辨」する視線で作ることを、基本的な性格としている。事實、張說のこれら「送～」の詩には、三首の聖製に奉和した應制の作（①⑧⑱）が含まれていることは、「送～」詩に內在するこうした儀禮的かつ權威的な性格を象徵するものと理解して良かろう。

拙稿「六朝期における離別詩の形成（下の一）――何遜を中心として」（『中國詩文論叢』第11集、一九九二年）において、六朝期の送別詩が主に「別～」系の命題を用いる平均的情況の中で、あえて「送～」の命題が用いられる特殊な場合について、以下のように述べた。

六朝離別詩に現れる「送～」の命題は、唐詩におけるよ

うに送別と留別との對立の中でその一方の送別を標記するものではなく、一義的にはむしろ、離別の場の性格――吳均の場合には儀禮性の濃淡、また公私の別――を規準におきつつ送別詩の中で選擇的に使い分けられるものであったことを示唆するであろう。儀禮を要しない、あくまでも私的と理解される場においては、たとえそれが送別の詩であっても、必ずしも「送～」とは命題されなかったと言うことである。（六二頁）

以上に指摘した六朝期における「送～」詩の性格、すなわち儀禮性と權威性とは、張説の「送～」詩においても基本的に繼承されていると判斷される。（そしてこの點が後述するように、張説の「送～」詩を、彼自身の送別の「別～」詩から區別するものとなる）。

＊　この「送～」詩の性格についての判斷は、次の、中央（國都）ならぬ嶺南・岳州という邊境にあって作られた例外的な諸篇が、それにも拘わらず「送～」の命題を用いることの意味を確認することによって、一層明らかである。

㋑嶺南送使

㋺南中送北使二首

㋩嶺南送使二首

㋥送岳州李十從軍桂州

先の三首は、嶺南の邊境に在りながらも、張説は上位にある公權力の行使者として、國都に歸る使者を送り出す。また㋥の岳州の作についても同樣であり、岳州刺史という地方行政の長官が、その職務の一環として、官命を帶びて桂州に赴任する官人を壯行する。このような作者の置かれた「權威ある立場」[4]が、作詩において「送～」の命題を選擇させているのである。

（二）「送～」詩の特徵　孟浩然

文人官僚として頂點（宰相）を極めた張説は、一つの極端な事例である。そこで次に、もう一方の極端にある在野の詩人、孟浩然を取り上げてみよう。孟浩然にあっては、ⓐ中央（國都）において、ⓑ官人の赴任を壯行するという二つの條件は、基本的に備わってはいなかった、その彼において「送～」詩は、張説のそれと如何に連續する特徵を示すのであろうか。

孟浩然の「送～」詩の特徵は、以下に記した詩題において先ず明瞭である（～～線は、旅立つ者の目的地と目的行爲）。

①送丁大鳳進士赴舉呈張九齡

②送吳悅遊韶陽

③送陳七赴西軍
④送從弟邕下第後尋會稽
⑤送辛大之鄂渚不及
⑥和盧明府送鄭十三還京兼寄之什
⑦高陽池送朱二
⑧鸚鵡洲送王九之江左
⑨送王七尉松滋得陽臺雲
⑩送張子容進士赴舉
⑪送張參明經舉兼向涇州覲省
⑫送張祥之房陵
⑬送吳宣從事（一作送蘇六從軍）
⑭送桓子之郢成禮
⑮早春潤州送從弟還鄉
⑯送謝錄事之越
⑰洛中送奚三還揚州
⑱送告八從軍
⑲送元公之鄂渚尋觀主張驂鸞
⑳送王五昆季省覲
㉑送崔遏
㉒送盧少府使入秦
㉓送袁十嶺南尋弟
㉔送袁太祝尉豫章
㉕都下送辛大之鄂
㉖送席大
㉗送賈昇主簿之荊府
㉘送洗然弟進士舉
㉙送韓使君除洪州都曹（韓公父常爲襄州使）
㉚送莫甥兼諸昆弟從韓司馬入西軍
㉛峴山送蕭員外之荊州
㉜送王昌齡之嶺南
㉝峴山送張去非遊巴東
㉞送朱大入秦
㉟送友人之京
㊱送張郎中遷京
㊲送新安張少府歸秦中
㊳送杜十四之江南

孟浩然が送り出した「被送者」は、詩題によって知りうる限りでも、科擧に應ずる者、地方官として轉任する者、省覲する者、落魄して故郷に歸る者、漫遊に出る者、等々、樣々

な境遇の人を含んでいて、張説が專ら地方に赴任する官人を送行したのとは、異なった様相を呈している。孟浩然が在野の士であり、彼がその世界で交わりを持つ人々は、臺閣にあった張説の場合とは異なって「雜多」だったのである。

しかしこのような制作の場（つまり被送者の身分）の相違を含みながらも、孟浩然の「送～」詩には、張説との目立った共通點がある。それは、詩題の大部分が旅立つ者の目的地點と目的行爲を明記することである。三八首の「送」詩の詩題は、四首の例外（⑦⑬㉑㉖）を除いて、他はすべて「送（人）（目的）」の構造を採っている。例えば、①「送・丁大鳳・進士赴舉呈張九齡」は、丁大鳳なる人が、進士科に應ずるべく出發するのを送行（また併せて要路の張九齡に合格たための便宜を請託）するものである。また㉜「送・王昌齡・之嶺南」は詩友の王昌齡が、嶺南に（左遷されて）赴くのを送行したものである。このようにして作品の主要な關心は、對者の未來の行爲（これから何處で何を爲すか）に向けられるのである。

こうして孟浩然は、張説の「送～」詩と基本的な性格を共有している。生涯の大部分を襄陽の地で在野の士として過ごした孟浩然は、「送～」詩が傳統的に持っていた權威性・儀禮性を、彼なりの次元に引き下ろして「模倣」したのである。地方から科擧受驗のために國都に上る青年を、あたかも任地に赴く官人のように壯行するのは、送別詩制作の恰好の機會である。また覲省という名目の歸鄉も、それが儒家的な家族倫理に根據がある故に、送別の詩をもって嚴かに送り出すに相應しい機會となった。こうして孟浩然は、宮廷の公的儀禮の場に成熟した「送～」詩を、民間の儀禮的空間の中に移植した。こうした工夫を通して、「送～」詩は、六朝以來の閉鎖された宮廷官場から解放され、在野の廣汎な作者層を手に入れることができたのである。

＊　孟浩然が文學史上に果たした役割は、在野の詩人が、從來のように隱逸を氣取るのではなく（近い過去では王績のように）、世間的な關心、あるいはより積極的な立身への願望を率直に保持しながら、それまでは官僚貴族しか參加できなかった文學の世界（一例としての送別文學）に加わる方途を發明したことである。この觀點で言えば、孟浩然の文學の中に隱逸（清淡）への志向を見出だそうとするのは、それが彼の文學の重要な一面であったとしても、彼に與えられるべき文學史的評價とは方向を逆にしている。

もっともこの時、孟浩然は一個人の立場で「送～」詩を作っていると解釋するのは、正確ではない。孟浩然にとっては、彼が屬する團體、つまり在地の名士集團とも言うべきものが、彼がこのとき據って立つ基盤だった。彼はいわば名士の一人の資格において、その土地を代表して送行の詩を制作したのである。[5]――つまり張說から孟浩然に至るまで、「送～」詩の作者は、一貫して集團に屬し、その集團の成員としての意識を體しながら、對者の未來の行爲（また特に世俗的營爲）に關心を向け、理性的な勸勵を事としたのである。作者個人に屬した、過去の回想を本質とする情緒的な惜別の感情の吐露は、「送～」詩の主要な關心事ではなかった。

（三）「送～」詩の特徵　小結

これまで張說と孟浩然の「送～」詩の性格について、簡單に考察を加えた。その結果を、箇條書き風に整理すると次のようになるだろう。

第一に、「送～」詩は權威性・儀禮性を持つ。この性格は、皇帝が地方官の赴任を送行する式典を範型として、文學によってこれを「模倣」する樣式と位置づけることができる。張說の「送～」詩が中央（國都）において官人の赴任を送行するのは、その範型に最も近い模倣であり、孟浩然の「送～」詩が地方（襄陽）において科擧の受驗に上る者を送行するのは、範型から比較的遠ざかった模倣となる。

第二に、「送～」詩の作者は、通常いうところの個人ではなく、送者と被送者の雙方をその成員として含んだ團體（利益ないしは價値觀で結ばれた集團）である。作者は、いわばその團體（張說における官僚集團・孟浩然における在地の名士集團）の成員としての資格において、「送～」詩の制作に當たるのである。從って、そこでは個人に屬する要素（被送者との個人的な交遊に由來する惜別の哀傷など）は、不要なものとして排除される。

第三に、「送～」詩の主要な關心が存するのは、被送者の未來の行爲（また特に世俗的營爲）であり、またそれについての理性的（つまり概ねは世俗的）な勸勵である。その被送者の未來に豫定された行爲は、彼が團體の成員であることによって、團體の關心事でもある。この意味は、地方官の赴任を送行する場合に、とりわけ明瞭となる。被送者が赴任地で治績を上げることを勸勵し、また順調な歸還を期待するのは、彼を送り出す團體（官僚集團）として最も自然で、しかも穩當な送別の言辭となるのである。

第四に、「送～」詩は、「沿路の敍景」を修辭の特徴とする。[6]「送～」詩の述べる言辭が「理性的な勸勵」だけであっては、文學にならない。そこに不足している離別の場に相應しい情緒を補償し、擬似的に惜別の氣分を演出するのが、「沿路の敍景」だったと理解して良かろう。送別の詩に現れる「沿路の敍景」とは、作者の惜別の想念が、豫定された旅の風景の中を、對者の影と手を携えながら辿ることを演出する、計算された抒情の樣式なのである。――しかしながらその「沿路の敍景」は、概ねは實感を伴うことなく文獻知識を點綴するだけに終わって、修辭伎倆の披露の域を超え出るものは、少なかった（正確には、過剰な感情の吐露は、そもそも集團の成員に相應しくない蛇足として、意識的に抑制された[7]）。

このような性格を持つ「送～」詩は、離別の文學の限られた一部分を代表するものとはなり得ても、決して圓滿な姿を示すものではない。その主要な原因は、作者が個人としての立場で、その離別の事件に直截に關わることができなかったことにある。「送～」詩には、目前に横たわる離別についての關心が稀薄であり、要するに、作者と被送者と閒に蓄えられた過去の交誼の回想が缺如し、この回想が詩の中に呼び起こす惜別の感情が稀薄なのである。

＊　念のため附言すれば、「送～」詩が離別に無關心な樣式であることは、作者個人が被送者との離別に無關心（無感動）であることと、一應は別の事柄である。しかし同時に、「送～」詩が、對者との交遊の積み重ねや、對者との離別による感動（哀傷）が無くとも制作することができる、冷靜で客觀的な樣式であることも、確認しなければならない。送別の文宴に連なる者は、必ずしも被送者と昵懇の關係にあるわけでもなく、またその總てが別れを惜しむ者でもない。とりわけ官人相互の社交の一環の中で、參加者は樣々な理由の下に、相い異なる思いを懷いて送別の宴席に參集する。こうした場において作られる「送～」の送別詩に、一律に、過去の交誼の回想を求めることも、また惜別の眞率な抒情を求めることもできない。「送～」の詩が、豫定された客觀的事實（目的地點・目的任務）に基づいて構成されるのは、宴席に集った者が、一律に同じ地點に立って送別詩の制作に當たり得る、そのために工夫された樣式だからである。すなわち「送～」詩には、冷靜で客觀的な樣式が備わらなければならなかった。

＊　上述の「送～」詩の性格は、盛唐後期の作品を基準に、歸納的に整理したものである。次の中唐前期（大曆～貞元）には、「送～」詩が盛唐後期にもまさって量産されることになる。この時期の「送～」詩は、團體を基盤とした送行という性格が後退し、これに伴い積極的な「勸勵」の要素が後退して、「哀傷」

が前面に出てくる（安史の亂後の消沈した世相もこの變化に大きく關わるだろう）。しかしその「哀傷」は、必ずしも當事者相互の交遊の回想を踏まえた具體的な惜別の哀傷ではなく、多分に類型化・定型化した情調となっている。「送～」詩が、離筵における集團的制作を作法の基本としていること、つまり個人に卽した抒情が制約されたことは、現れ方はこそ異なるが、盛唐後期の「送～」詩のみならず、中唐前期の「送～」詩の抒情をも規定していると言えるだろう。

（四）「別～」による送別――張說

孟浩然らの工夫によって、「送～」詩は、狹い臺閣から解放され、民閒の幅廣い舞臺を獲得する。しかも、表現手法が次第に特定の樣式（五言律詩型・沿路の敍景）として成熟するに伴い（簡明には作法の指南化（マニュアル）に伴い）、「送～」詩は、盛唐後期から中唐前期にかけて、最も多くの作品を集める作品群に成長した。

しかし前述したように、「送～」詩は一方で、離別の場における個人の抒情という點であらかじめ大きな制約を設けるものでもある。抒情の柔軟さを缺き、しかも樣式の安定のみが進行するこの「送～」詩は、すでに盛唐後期に、千篇一律の弊害を生む危險と背中合わせの狀態にあったとも言えるであろう。――しかしながら、このことを危機と見る詩人も、その一方に存在していたと考えて良い。張說は最も早くその問題に氣付き、高適は、恐らくは最も深刻にその問題を了解した詩人であった。そのことは、樣式化された「送～」詩の全盛期にあって、この二人の詩人が「別～」の命題を用いた多くの送別の詩を作っている事實からも、窺い知ることができるであろう。

では「別～」系の命題による送別詩は、「送～」詩に對して如何に異なる性格を主張するのであろうか。それに對する一つの回答は、盛唐初期の代表的な「送～」詩の作者である張說において、すでに用意されていた。

張說は、「別～」系の命題を持つ離別詩を凡て十三題（十四首）、傳えている。次にその詩題を書き出しておこう。

①別平一師
②相州前池別許鄭二判官景先神力
③岳州宴別潭州王熊二首
④岳州別姚司馬紹之制許歸侍
⑤岳州別趙國公王十一琚入朝

⑥岳州別子均
⑦端州別高六戩
⑧南中別蔣五岑向青州
⑨南中別陳七李十
⑩南中別王陵成崇
⑪幽州別陰長河行先
⑫石門別楊六欽望
⑬岳州別梁六入朝

「別～」系の命題は、初唐後期には基本的に留別の詩に用いられていた。しかしこの趨勢に反して、張説のこれらの詩は、總てが送別の詩となっている

そして第二の特徴は、その送別の地點が一つの例外もなく、「地方」ないしは「邊境」の地の制作に限られていることであろう。すなわち「相州（河南安陽）」「岳州」「端州（廣東肇慶市）」「南中（兩廣）」「幽州」「石門（浙江青田縣石門山？）」は、相州が比較的京洛に近いのを除けば、何れも當時は邊境と意識される土地である。またとりわけ「端州」「南中」は、嶺南の地に他ならず、そこは張説が則天武后治世の末年、寵臣であった張昌宗・張易之に忤らって却って誣告され、流竄された土地である。このように制作地不明の①を除き、總ての「別～」詩が、地方・邊境の地における制作であることは、張説の一方の「送～」詩が、中央（國都）において官人の赴任を壯行するものによって占められていた事態と、截然と對立している。この事實は、張説が「送～」との對立の中で、「別～」系の命題を意識的に用い分けていたことを意味している。

張説の送別における「送～」詩と「別～」詩との對立、その根柢にあるのは、權威と儀禮とによって文飾された「中央」と、それを持たない「地方」との落差である。張説は六朝以來の「送～」詩の傳統に從って、中央において作られた、權威と儀禮とを特徴とする送別の詩に「送～」の命題を與えた。――そしてこれに相當しない非「權威的・儀禮的」な送別の詩に對して「別～」の命題を與たのも、やはり六朝以來の命題法に從ってのことと理解して良かろう（「別～」の命題は大朝時代には、送別・留別の雙方に用いられた。これを專ら留別に用いるのは初唐後期以後の用法）。

もっとも張説の「別～」詩は、制作地點の相違（中央か地方か）を除けば、「送～」詩との對立は一見したところ必ず

しも大きいものではない。このことは、張説が地方において別れた相手が、國都で彼が壯行したのと同様の官人だったことと關わるのであろう。しかしながら、作品の關心（つまり主題）の置き方は、兩者で大きく異なっている。

岳州別趙國公王十一琚入朝

岳州にて趙國公王十一琚の入朝するに別る

昔濫貂蟬長　昔は貂蟬の長きを濫りにし
同承雨露霏　同に雨露の霏たるを承けたり
今參魚鱉守　われは今　魚鱉の守に參じ
望美洞庭歸　きみは望美にして洞庭より歸る
浦樹懸秋影　浦樹　秋影（太陽）を懸け
江雲燒落輝　江雲　落輝に燒かる
離魂似征帆　離魂　征帆に似て
恆往帝鄉飛　恆に帝鄉に往かひて飛ぶ

王琚（685？―746）は中宗のとき、武三思の專横を抑えようとして失敗し、江都に逃亡したことがある。玄宗卽位の後は、太平公主を誅するときの功によって玄宗の信任を得、趙國公に封ぜられた。張説が、かつて則天武后の寵臣、張昌宗兄弟と對立して嶺南に左降されたのと、相い通ずる經歷である。「昔濫貂蟬長、同承雨露霏」は、作者も王琚も、かつて玄宗の寵愛を得たことをいう。しかしこの時、張説は岳州刺史に貶されており、一方、地方官だった王琚は國都に歸る途次、岳州に張説を訪ねた。頸聯「浦樹懸秋影、江雲燒落輝」は、浦樹の枝に掛かった秋の夕日が、江雲を赤く焦がして輝くさまを寫して、秀逸である。張説の胸を燒く焦燥の思いを暗示するのであろうか。

高官の旅立ちを送るという點では、中央と地方との場所こそ異なれ、大差はないように見える。しかし二つの相違に注目しなければなるまい。第一に、王琚との舊交が、前提として回想されていること（首聯）。「送～」詩が、團體の成員の意識の下に制作され、個人の次元の交遊は努めて回想されないことと、この點で相違している。第二に、作者自身の境遇について、多くが敍べられていることである。岳州刺史という不如意の境遇が、「望美」の榮譽を耀かして歸京する王琚の境遇と對比される。そしてその不遇感は、尾聯「離魂似征帆、恆往帝鄉飛」の詩句となって、直截に吐露されるのである。このような作者の個人に屬する感情の表白は、「送～」詩では抑制されるべきものである。

なお附言すれば、「送～」詩では、「被送者の目的地點ないし目的行爲との明記」が詩題の特徴であった。これに對して張説の「別～」詩は、これを明記しない作品が過半を占めて、この點が「別～」詩の大きな特徴となっている。その中の少ない例外として、この「岳州別趙國公王十一琚入朝」がある。しかし上述のように、この詩の關心は、今の離別の哀傷を抒べ、不遇な境遇に取り殘される作者自身の焦燥を抒べることにある。つまり王琚が「入朝」することは、その土地（京洛）が北方にあって張説の歸京の願いを惹くことを除けば、張説の關心は、それ以上この點に向かうことはなかった。――「別～」詩は、離別の今に關心を置いて、未來には關心を示さない。こうした基本的な性格は、詩題にも、また詩の本體にも反映されているのである。

こうして張説の「別～」系の命題は、初唐後期に定着しつつあった命題の新しい原則、すなわち送別詩の「送～」・留別詩の「別～」（ないしは「留別～」）という分擔とは全く異なって、むしろ舊い六朝以來の原則に從うものだった。このような張説の「別～」の命題のありかたは、この面だけを取り出せば、例外的で保守的な用法として片付ければ足りるであろう。しかしその後の盛唐期の送別の詩が、大勢として「送～」詩によって獨占されたとき、「送～」詩の枠組から排除された個人の抒情は、却って「別～」の命題の中に出口を求めることになる。張説の「別～」詩は、この點で、盛唐期の送別詩に對する重要な提案を含んでいたことになる。

（五）の一　「別～」による送別――高適

盛唐後期の「別～」系の命題による送別詩の制作では、高適が代表的な作者である。以下に、その詩題を示す（白抜きは留別の作）。

①宋中別周梁李三子
②宋中別李八
③別王徹
❹贈別王十七管記
⑤漣上別王秀才
⑥贈別沈四逸人
⑦別（一作送）張少府
⑧淇上別劉少府子英
⑨別耿都尉
❿宋中遇林慮楊十七山人因而有別

⓫酬別薛三蔡大留簡韓十四主簿
⓬途中酬李少府贈別之作
⓭睢陽酬別暢大判官
⓮宋中遇劉書記有別
⓯贈別晉三處士
⓰別韋參軍
⓱平臺夜遇李景參有別
⓲別韋五
⓳別劉大校書
⓴宋中別司功叔各賦一物得商丘
㉑別韋兵曹
㉒別從甥萬盈
㉓別崔少府
㉔別（一作送）馮判官
㉕廣陵別鄭處士
㉖別孫訢
㉗贈別褚山人
㉘別王八
㉙宴郭校書因之有別
㉚東平別前衞縣李宋少府
㉛夜別韋司士得城字
㉜別董大二首

これらの「別～」詩には、四首の留別の作（❹❿⓫⓬）も含まれている。しかしその大部分（八八％）は送別の詩であり、この顯著な傾向は、高適の「別～」詩を、他の詩人の「別～」詩から決定的に特徴づけている。繰り返し述べたように、初唐後期の陳子昂以降、「別～」は主に留別の命題であった。

高適の「別～」詩について指摘すべき第二の特徴は、彼自身の「送～」詩との比較における特徴である。孟浩然の三八首の「送～」詩は、四首の例外を除いて、「送（人）（目的）」の構造を採るものであった。「送～」詩が「これから何處で何を爲すか」に關心を示して、それを詩題に明記する傾向は、孟浩然を一つの典型として、當時の詩人に一般に認められることである。この點では高適の「送～」詩も同樣であり、彼の三二首の「送～」詩において、七二％に目的が明示されている。[8] これに對して、今ここに取り上げた「別～」詩は、目的を明示するものが極めて少數（十二％）であり、兩者は有意味な相違を示している。すなわち高適の「別～」詩一般は、

その「送～」詩に比較して、被送者の未來の營爲についての關心が明らかに低いのである。

＊　一方、高適の「送～」詩の目的を明示する割合（七二％）は、他の詩人の場合に比べて稍や低い（孟浩然は八九％）。この傾向は、恐らくは高適に、「送～」詩の定型化した様式を避けようとする意圖が働いていたためであろう。その意圖は、「送～」詩の中では目的明示の割合を若干は引き下げ、さらには「送～」詩の様式そのものに拘われることのない「別～」詩の制作に向かわせたと考えるのが適當だろう。

（五）の二　「送～」詩の特徴についての確認

高適の「別～」詩についての考察をさらに進めるに先立って、行論の便宜上、彼の「送～」詩について必要な確認をしておきたい。すでに張説と孟浩然の「送～」詩に即してその特徴を整理してあるのが、ここでは參考になる。

送李少府貶峽中王少府貶長沙

李少府の峽中に貶され王少府の長沙に貶さるるを送る

送別における「送」と「別」―高適送別詩論考（松原）

嗟君此別意何如　嗟く　君　此の別れ　意　何如ん
駐馬銜杯問謫居　馬を駐め杯を銜みて　謫居を問ふ
巫峽啼猿數行淚　巫峽の啼猿　數行の淚
衡陽歸雁幾封書　衡陽の歸雁　幾封の書
青楓江上秋天遠　青楓の江上　秋天遠く
白帝城邊古木疏　白帝の城邊　古木疏なり
聖代卽今多雨露　聖代　卽今　雨露多し
暫時分手莫躊躇　暫時　手を分かつ　躊躇する莫かれ

李攀龍『唐詩選』にも採られたこの詩は、高適らしい、無骨で腰のすわった風格を備えた佳篇である。異なる土地に左遷される二人の縣尉を壯行することから、この詩は國都長安の作と見て相違あるまい。――ところでこの詩は、「沿路の敍景」という「送～」詩に特徴的な手法を、典型的に運用した作例となっている。「巫峽啼猿數行淚」「白帝城邊古木疏」は、三峽の風土を詠み込んで、峽中に貶された李少府の行く手を描寫し、「衡陽歸雁幾封書」「青楓江上秋天遠」は、湘中の代表的な風土を取り上げて、長沙に貶される王少府の行く手を描寫する。頷聯の「數行・幾封」が數對を、頸聯の「青楓・白帝」が色對を構成して、修辭的技巧にも怠ることはな

い。

この作品の「沿路の敍景」については、いずれも文獻的知識に基づくことを忘れてはならない。「巫峽啼猿數行淚」が『水經注』江水に引く「巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾裳」の古謠を踏まえること、「衡陽歸雁幾封書」が衡陽縣の回雁峰に關する傳說と、前漢の蘇武にちなむ雁信の說話を意識することは、言うまでもない。また「靑楓江上秋天遠」が、『楚辭』「招魂」の「湛湛江水兮上有楓、目極千里兮傷春心。魂兮歸來哀江南」を意識し、楓樹は、湘水の風景と一體のものである。また「白帝城邊古木疏」は、白帝城が後漢初期の公孫述、竝びに蜀漢の劉備の居城であり、そこは古木も疏らになる程に長い歷史を閱した古塞であることを前提としている。要するに、高適自身の體驗に依據した風土の描寫ではなく、また彼自身の想像力によって無から構成された光景でもなく、すでに用意された文獻的知識に基づいて二次的に再現された景色であることが、この部分の特徵なのである。こうした古典的敎養を素材とした、「型通り」の描寫が、「送～」詩における「沿路の敍景」の典型である。換言すれば、そこにあるのは客觀的な修辭技術であり、今に脈動する生々しい感情とは異質な、冷靜な計算である。

次には、五言律詩の作例。西域の沙漠を舞臺にした送別である。

送裴別將之安西　　裴別將の安西に之くを送る

絕域眇難躋　　絕域　眇（はるか）にして躋（こ）え難く
悠然信馬蹄　　悠然として馬蹄に信（まか）す
風塵經跋涉　　風塵　きみは跋涉を經む
搖落怨暌攜　　搖落　われは暌攜（離別）を怨む
地出流沙外　　地は出づ　流沙（張掖郡居延澤）の外
天長甲子西　　天は長し　甲子の西
少年無不可　　少年　可ならざる無し
行矣莫悽悽　　行け　悽悽たる莫かれ

西域は、遙かに遠くて行き着き難いが、何處までも馬に任せて進むしかない。君は、これから兵塵を冒して任地へと赴く。この搖落の哀しい季節に、人と別れるのは堪え難い。その地は、流沙のさらに遠く、その天は、九州の分野からはみ出た邊境にある。しかし少年の君のこと、無理なことは何もない。さあ行け、悲しむのではない。―

西域の風土を的確に掴んだ、すぐれた邊塞詩である。しか

し「送別の」詩としてこれを見るならば、旅立つ者の具體性も、彼を見送る作者の心情も、殆ど完全なまでに捨象されている。例えば「搖落怨暌攜」は、この詩中にあって唯一の悲哀を抒べた詩句ではあるが、そこには秋という搖落の季節に對する感傷一般を感じ取ることはできても、この場の離別に固有の感情（つまりこの離別の當事者同士の心情の交感）を讀み取ることは難しい。しかも詩の末尾に現れるのは、「少年無不可、行矣莫悽悽」という形式的な勸勵の言辭に過ぎない。――この詩は、「送～」詩の多くがそうであるように、「沿路の敍景」を中核に据えた構成を持つ。しかもその沿路に廣がるのが、日常性を絶した特異な沙漠であることによって、「沿路の敍景」は、もはや離別の抒情に奉仕するのではなく、敍景それ自體の價値を自ら主張するものとなっている。すなわち、讀者が讀み取るこの詩の魅力は、離別詩にではなく、邊塞詩としてのそれにあるのであって、眇小な人間を點ずることによって描き出される荒漠たる世界の壓倒的な臨在が、この詩の核心なのである。(9)

高適によってここに送行される裴別將は、案外、滿足だったはずである。自分の名前が書き込まれたすぐれた邊塞詩を贈られることは無條件に名譽なことであり、惜別の心情の多少は、ここでは二義的な意味しか持たなかったであろう。離筵で多くの者たちによって一齊に作られる「送～」詩とは、畢竟、このような關心に支えられていたのである。

次は、前詩の舞臺（水分と文化の缺乏）とは正反對の江南の風土を舞臺とした送別詩である。「李九」は李翥。この時に先立つこと約十年、天寶三載に單父において結識して以來の知友である（高適「觀李九少府翥樹宓子賤神祠碑」）。

秦中送李九赴越

秦中にて李九の越に赴くを送る

攜手望千里　手を携へて千里を望む
于今將十年　今に于りて　將に十年ならんとす
如何每離別　如何せん　離別の每に
心事復迍邅　心事の復た迍邅たるを
適越雖有以　越に適くは以ゐ有りと雖も
出關終耿然　關を出づれば終に耿然(不安)たらん
「愁霖不可向　愁霖　向かふ可からず
長路或難前　長路　或いは前み難からん
吳會獨行客　吳會　獨行の客
山陰秋夜船　山陰　秋夜の船

謝家徵故事　謝家　故事を徵(もと)め
禹穴訪遺編　禹穴　遺編を訪はん
鏡水君所憶　鏡水　君の憶ふ所
蓴羹餘舊便　蓴羹　餘は舊(かつ)て便(な)れたり
歸來莫忘此　歸來　此を忘るる莫く
兼示濟江篇　兼ねて江を濟るの篇を示せ

五言古體詩。越中（吳會・山陰）に赴任する李翥を送行する詩。「吳會獨行客」「山陰秋夜船」とは、越中に赴任することを、二句に分散して言ったもの。越中への赴任は、吳を通る。そこで「吳會（吳中と會稽）」の語があり、また「蓴羹餘舊便」の句がある。

「沿路の敍景」が、主に文獻的知識に基づいて構成されることは、この詩においても同斷である。「山陰秋夜船」は、王徽之が、夜船を仕立てて友人の戴逵を訪ねたが、その門前まで至って興が盡き、會わずに引き返した、という『世說新語』「任誕篇」に記す有名な故事を意識しよう。「謝家徵故事」は、代表的な人物としては、謝安が天子からの屢しばの徵しを斷り、東山に退居して世を睥睨した故事が思い出される。「禹穴訪遺編」は、會稽の宛委山にある禹王にちなむ遺跡で、この地にかつて黃帝が書籍を貯藏し、それを禹王が得て讀んだと傳えられている。「遺編」とは、その黃帝の遺した書籍を言う。「蓴羹餘舊便」は、西晉の張翰が、洛陽で秋風の起こるのを見て、故鄕である吳中の菰菜と蓴羹と、鱸魚の膾を思い出して直ちに歸途に就いたという有名な故事を踏まえる。また「兼示濟江篇」とは、謝靈運の「酬從弟惠連」詩の「傾想遲佳音、果枉濟江篇（君を思って佳作が屆けられるのを待ち望んでいたところ、果たして江を濟る詩篇を下さった）」とあるのを踏まえる。その謝惠連の「濟江篇」とは、「西陵遇風獻康樂」詩である。つまり高適は、李翥が越中からの歸途、長江を渡るときに作った佳篇を、是非、自分への土產にして欲しいと言うのである。

この詩が作られたのは、「秦中」（長安）である。李翥は、このとき會稽の地方官となって赴任する。李翥は、十年來の舊知である。そこで詩は、「攜手望千里、于今將十年。如何每離別、心事復迍邅」という友情の確認と、離別の苦痛とを抒べることから始められる。この意味で、單なる儀禮的追從の作とはなるほど一線を畫している。しかしながらこの詩の核心的部分は、後半に對偶を驅使して整然と積み上げられる「沿路の敍景」であり、そこに運用されているのは、文獻的

知識を前提とした、（しかし離別の悲哀とは直接しない）[10]あくまでも客觀的な修辭技巧なのである。この詩の讀者に與える端正な風格は、こうした主觀を排した作法と一連のものである。

ところで岑參にも「送李翥遊江外」の作があり、天寶十一載當時の高適と岑參の親密な交遊、及びいずれも近體五言排律に接近した韻律を採用する點を考え併せると、同じ離筵における制作と判斷される。

送李翥遊江外　岑參

相識應十載　見君只一官　家貧祿尚薄　霜降衣仍單
惆悵秋草死　蕭條芳歲闌　「且尋滄洲路　遙指吳雲端
匹馬關塞遠　孤舟江海寬　夜眠楚煙濕　曉飯湖山寒
砧淨紅鱠落　袖香朱橘團　帆前見禹廟　枕底聞嚴灘」
便獲賞心趣　豈歌行路難　青門須醉別　少爲解征鞍

この岑參詩も高適の場合と同様に、第七句～十二句には對偶を用いた沿路の敍景が端然と展開されている。兩者の作品の詩型と、表現手法に及ぶ共通性は、この二篇が單に同時の制作であったばかりか、相互的な緊張關係の中であえて類似の様式の下に競作されたものであることを窺わせている。「送～」詩が、團體（ここでは詩人集團）を前提とし、離筵における集團的制作を作法とすることは、このような相互作用を馴致することになり、そこでは突出した個人の抒情は自ずと制約を受けるのである。

以上、高適の「送～」詩について瞥見したが、すでに指摘した「送～」詩の特徴が、基本的には高適においても再確認できたであろう。――「送～」詩は、個人が個人を送るのではなく、團體が、團體の成員を送り出す儀禮の中で作られるものである。離筵は、その團體の社會的責任の下に執り行われる。つまりそこにおいては、離筵に參加する人は、個人としての顔ではなく、團體の成員としての顔を向けて、對者を送り出す。「送～」詩の示す様々な特徴は、概ねこの一點と關わって導かれるものなのである。

なお一點の補足をする。高適の「送」の送別詩は、天寶一一載(752)の秋、高適が封丘の縣尉を罷めて長安に出てきた時期以降に集中して作られている。孫欽善『高適集校注』の編年に據れば、以下に詩題を掲げる十四首の「送～」詩は、いずれもこの年の秋の制作である（なお孫欽善はペリオ3619に據っ

てさらに「餞故人」を補う）。

①送渾將軍出塞　②送李侍御赴安西　③送裴別將之安西　④送蹇秀才赴臨洮　⑤送白少府送兵之隴右　⑥送董判官　⑦送劉評事充朔方判官賦得征馬嘶　⑧送崔功曹赴越　⑨秦中送李九赴越　⑩送鄭侍御謫閩中　⑪送桂陽孝廉　⑫河西送李十七　⑬送李少府貶峽中王少府貶長沙　⑭送別

高適の「送」詩は、合計三三首。孫欽善がその中の上記十四首詩を、總て天寶十一載の秋三ヶ月に繫年するのは稍や極端に過ぎるとしても、[11]「送～」詩の多くが長安期に遽かに集中して作られたことは確實である。そしてこの事實は、「送」詩の制作にはそれを可能にする特定の環境があることを示唆しているだろう。

詩題を一瞥すれば分かるように、⑭の一首を除き、他の十三首はいずれも官人の赴任を送行するものである。長安は、全國一圓に根を張った官僚組織の中心であり、官人を地方官として不斷に送り出し、また地方から吸い上げる巨大なポンプである。そして「送～」詩とは、このような環境の中に最も適應した様式である。封丘の縣尉を擲って長安に乘り込んできた高適は、直ちに官人との接觸を開始し、さらには自ら哥舒翰の幕僚となって西域に赴任する。高適は、詩人としての意識としても、また實際の職務としても、これに先立つ宋中屏居の時期とは明らかに異なる地平に立って、「送～」詩を量產し始めたのである。

（五）の三　「別～」詩の特徵

これから論ずる高適の「別～」詩は、如上の「送～」詩とは明確に對立している。――「別～」詩は、あくまでも個人が、しかも對等の友人としての資格において、被送者との離別を惜しむ詩なのである。

このような性格を持つ「別～」詩は、對者の豫定された未來（沿路・任務）ではなく、目前の離別に關心を持つ。そこで作品に描かれるのは、「沿路の敍景」でもなければ、「未來に向かう勸勵」でもなく、それとは方向を逆にするように「離別の場にある現在の光景の描寫」であり、「過去に向かう回想」である。[12]しかも注意すべきは、そのいずれもが作者自身との關わりの中から述べられることであろう。離別の場が、對者のみならず、作者自身にも屬することは言うまでもない。また對者の過去も、單に客觀的な履歷の情報としてではなく、作者自身との交際に引き付けて語られるのである。

送別における「送」と「別」—高適送別詩論考（松原）

別韋參軍

1二十解書劍　　韋參軍に別る

西遊長安城　　二十　書劍を解して

舉頭望君門　　西のかた遊ぶ長安城

屈指取公卿　　頭を舉げて君門を望み

國風沖融邁三五　　指を屈して公卿を取らんとす

朝廷歡樂彌寰宇　　國風の沖融　三五を邁ぎ

白璧皆言賜近臣　　朝廷の歡樂　寰宇に彌ぎる

布衣不得干明主　　白璧　皆な言に近臣に賜はり

歸來洛陽無負郭　　布衣　明主に干むるを得ず

東過梁宋非吾土　　歸り來たれば　洛陽に負郭無く

11兔苑爲農歲不登　　東のかた梁宋を過ぐるも吾土に非ず

雁池垂釣心長苦　　兔苑に農を爲すも　歲　登らず

世人遇我同衆人　　雁池に釣を垂るるも心　長に苦しむ

唯君於我最相親　　世人　我を遇すること衆人に同じく

且喜百年有交態　　唯だ君のみ我に於て最も相ひ親しむ

未嘗一日辭家貧　　且く喜ぶ　百年に交態有るを

彈棋擊筑白日晚　　未だ嘗て一日も家の貧しきに辭せず

縱酒高歌楊柳春　　棋を彈ち　筑を擊てば　白日晚れ

歡娛未盡分散去　　酒を縱にして高歌すれば楊柳春なり

使我惆悵驚心神　　我を使て惆悵して心神を驚かしむ

21丈夫不作兒女別　　丈夫は作さず　兒女の別れの

臨岐涕淚沾衣巾　　岐に臨みて　涕淚　衣巾を沾すを

この詩は、高適の初期の作品と推定される。二十歳の時分、高適は仕途を求めて長安に上ったが、意の如くならずに歸鄉（高適の鄉里は洛陽附近と推定される）し、さらに東の宋中（宋州宋城縣、今の河南商邱縣）に寓居する。その宋中屏居の時期に交遊を結んだ韋參軍が、このとき旅立つのと離別した作である。

作品は、前半の十二句まで、作者高適の長安上京と蹉跌、そして宋州の地における沈淪という不遇の前半生の回想に當てられる。高適早年の傳記資料が備わらない中にあって、この詩はその缺を補う唯一無二の材料となっている。

この詩の主旨は、友人との離別という事件において、自己の不遇を確認することにある。高適は、不遇であるために、孤獨だった。「世人遇我同衆人」。しかしこの人だけは、野にあって沈淪する高適の中に價値を認め、かくして高適の大切な知己となった。「世人遇我同衆人、唯君於我最相親」。今その韋參軍を失う經緯のなかで、高適は自己の孤獨と直面する

のであり、社會から捨て置かれた自己の不遇を改めて反芻するのである。――この送別の事件の中で作られた詩の特徴は、紛れもなく惜別の思いを綴るにも拘わらず、つまり被送者との心靈の交流が確かな前提としてあるにも拘わらず、被送者韋參軍の具體的な姿が、例えばその經歴も、現在の境遇も、旅立つ目的も、全く書き込まれていないことであろう。しかしながら韋參軍は、高適の惜別の言辭を受け取ることによって、紛れようもない確かな存在感を具えるのである。その存在感とは、單に彼が高適と同様の在野の人士であったというような外形的社會的な特徴づけを言うのではない。高適から眞實の惜別の言辭を引き出すことができた、その様な人格的存在感の意味である。

この詩は、送行（送り出し）を主題とするものではない。そこに抒べられるのは、作者の境遇であり、また作者の胸中にわだかまる不平であって、旅立つ者に向けられるべき配慮はその一切が撥無されている。しかし旅立つ者が、彼の友人から最も受け取りたいと願うのが、別れかねて悲しむその惜別の思いであるとすれば、その思いを綴ったこの詩こそ、離別詩に本來のあり方と言わなければなるまい。――もっともこの様な詩は、盛唐期に量産された「送～」と命題される詩とは、明瞭に方向を異にするものであった。

右の詩は、長篇の古體詩である。では五言律詩の場合、「別～」詩はどのように作られるであろうか。

別孫訢　孫訢に別る

離人去復留　　離人　去りて復た留まる
白馬黑貂裘　　白馬　黑貂の裘
屈指論前事　　指を屈して前事を論じ
停鞭惜舊遊　　鞭を停めて舊遊を惜しむ
帝鄉那可忘　　帝鄉　那ぞ忘る可けん
旅館日堪愁　　旅館　日に愁ひに堪へたり
誰念無知己　　誰か念はん　われに知己無くして
年年睢水流　　年年　睢(すゐ)水の流るるを

旅人は、去りがてに立ちもとおる。白馬と、黑貂の出で立ちだ。自分は、指折り數えて往事を語り、君は、馬を留めてかつての交遊を懷かしむ。長安の都を、どうして忘れることができようか。しかし自分は今、異鄉にあって日々愁いに沈むばかりだ。自分には推挽してくれる知己もなく、睢水の流れの邊りで、空しく歳月を送っていることを、いったい誰が

分かってくれるだろうか。―

孫訢が今なぜこの地を出立するのかは、詩中に示されてはいない。「白馬黒貂裘」の出で立ちは、官人となっての赴任であることを窺わせるものであるが、少なくともこの詩を作る時の高適には、その出立の理由は大きな關心事とはなっていない。また旅立つ孫訢も、自分の未來について語ろうとはせず、二人の舊交をただ懷かしむのである。「屈指論前事、停鞭惜舊遊」。

詩は後半に至ると、臆することなく作者自身のことを語り始める。「帝鄉那可忘、旅館日堪愁」とは、高適が二十歳の前後に長安に上ったものの、落魄して歸鄉したこと、しかも鄉里にも落ち着くこともできずに、宋中の地に客寓の生活を始めたことを敍べる。さらに尾聯「誰念無知己、年年睢水流」は、推挽してくれる知己がいないばかりに宋中に沈淪して、何時までも睢水の流ればかりを眺めていることの焦燥を吐露して終わるのである。

作品の布置がこのように自己の境遇を敍べることに重點を置く以上は、この詩は前詩「別韋參軍」と同様に、送行（送り出し）を主題とするものではないと理解するのが適當だろう。離別詩でありながら、送行を主題としないこと――つまり離別という事件が、被送者の未來への冷靜な配慮を生むのではなく、却ってその場（その土地・その境遇）に依然として留まる作者自身の感慨を吐露せしめること――それが「別～」詩の特徴なのである。

上述の二篇は、作者自身について多くを語った作品である。この點で、自身について語らない次の詩はやや異質ではある。

別崔少府　　崔少府に別る

知君少得意　　知る　君　意を得ること少く
汶上掩柴扉　　汶上　柴扉を掩ふを
寒食仍留火　　寒食　仍ほ火を留め
春風未授衣　　春風　未だ衣を授けず
皆言黃綬屈　　皆な言ふ　黃綬に屈するも
早向青雲飛　　早く青雲に向かひて飛ばんと
借問他鄉事　　借問す他鄉の事
今年歸不歸　　今年　歸るや歸らざるや

私には分かっている、君が不遇のままに、汶水の邊りで侘び住まいに甘んじてきたことを。寒食の節日にも、こごえて火を落とすこともできず、春風が吹き始めても、衣更えもで

きない有様だった。君は、縣尉という微官に淪んでいるが、やがて青雲に向かって羽ばたく人物であることは、誰もが承知だ。さて君は、これから縣尉となって他郷に旅立つが、今年は、はたしてお帰りになるのだろうか。―

この詩は、先の二篇とは異なって、高適自身を語ることはない。しかし「送～」詩とは明らかに異なる造作をもっている。すなわち、被送者の過去の生活に多くの關心を示していることである。その生活とは、柴扉の中に過ごされた、在野の士としての清貧の生活である。頷聯の二句は、清貧を物語る象徴的な事件である。そしていま彼は、少府（縣尉）という微官に就いて赴任する。しかし高適の關心は、その職務における活躍を期待することにはない。確かに衆人の口を借りて、「皆言黄綬屈、早向青雲飛」とその人の能力を稱讃している。しかしその言辭は、これまでも不遇であり、いまの少府に赴任するときにあってなおも不遇である彼を慰藉するだけのものである。つまり「送～」詩一般に、また高適自身の「送～」詩にもしばしば現れるような、出世を期待する型通りの勸勵の言辭ではない。――今年中に自分のそばに歸ってくるか否かを訊ねて、歸來を期待するのは、高適の思いが那邊にあるのかを端的に示すものである。

すなわちこの詩には、「送～」詩を特徴づける「沿路の敍景」も、また「對者の未來の營爲に向ける勸勵」も存在していない。徹頭徹尾、對者の不遇な生活に卽することによって、その對者と密接した境遇にある自己を自然と浮き上がらせる。こうしてこの作品は、密接したもの同士の離別を描いて、惜別の心情を吐露するのである。

＊　以上の三篇は、いずれも「送～」詩と明確な差異を示すものを取り上げた。しかし一方には、様式上の區別が殆ど付かないものも存在するのは、文學作品としてむしろ自然なことである。

別（一作送）馮判官

碣石遼西地　漁陽薊北天　關山唯一道　雨雪盡三邊
才子方爲客　將軍正渴賢　遙知幕府下　書記日翩翩

この詩は、自己の境遇について語らず、また對者との交誼についても語らない。沿路の敍景（詩の前半）と、未來の職務への勸勵とに主旨を置いた手法は、「別～」の詩としては例外的と言っても良かろう。詩題の異文に「送馮判官」があることは、この點で單なる偶然を超えた意味を持っている。原文がいずれであったかは知る由もないこととして、傳寫の閒にこのような異文を生じていたことは、この詩の手法が「送～」の詩と違和感を覺えさせない程に接近していたことを物語る。

「送～」詩は、離別の今ではなく、被送者の未來に關心を

示して、しばしば被送者の未來の營爲に對して勸勵・鼓舞の言辭を添えることになる。これに對して離別の今に關心を持つ「別〜」詩は、詩題においても、また作品の本體においても、被送者の未來に關心が向くことは少ない。その中にあって次に讀む詩は、被送者に對する鼓舞を含んだ例外的な作品と言えるだろう。

宋中遇劉書記有別

宋中に劉書記に遇ひて別るる有り

何代無秀才　何れの代か秀才無からん
高門生此才　高門　此の才を生ず
森然睹毛髮　森然として毛髮を睹れば
若見河山來　河山の來たるを見るが若し
幾載困常調　幾載　常調に困しむも
一朝時運催　一朝　時運　催す
白身謁明主　白身　明主に謁し
待詔登雲臺　待詔して雲臺に登る
相逢梁宋閒　相ひ逢ふ　梁宋の閒
與我醉蒿萊　我と與に蒿萊に醉ふ
寒楚眇千里　寒楚　眇(はるか)にして千里
雪天晝不開　雪天　晝も開かず
末路終離別　末路　終に離別
不能强悲哀　强ひて悲哀する能はず
男兒爭富貴　男兒　富貴を爭ふ
勸爾莫遲迴　爾に勸む　遲迴する莫かれ

詩題は「別〜」詩としては稍や變則だが、偶然の出會いに續く離別を敍べるための、便宜的命題と考えれば良かろう。

彼は、幾度か常調（科擧の常科？）に落第した後、恐らくは天子が臨時に行う「制科」に及第して、掌書記に任官されたものと思われる。そして赴任の途次、宋中に高適を訪ねたのであろう。念願も叶い、しかも「白身謁明主、待詔登雲臺」という優渥を受けて官途に就くことになった劉某に對して、高適は鼓舞の言辭を惜しまない。「男兒爭富貴、勸爾莫遲迴」。このような對者の未來の營爲への勸勵を含む點において、この詩は、「送〜」詩と一脈通ずるとしなければならない。

しかしこの詩は大きな點で、「送〜」詩とは異なっている。高適は、劉某がこれから就く職務の實際には、必ずしも關心を向けていない。この詩には、劉某が何れの地に赴任するかも示されていない。[13] しかもこの結果、一般に「送〜」詩が修

辭を凝らす「沿路の敍景」は、この詩には存在する餘地すら用意されていないのである。

ではこの詩が、劉某の赴任地を示さず、彼の官人としての職務に無關心であるにも拘わらず、しかし「男兒爭富貴、勸爾莫遲迴」という鼓舞の言辭があることを、どう解釋すべきであろうか。

前述したように「送～」詩の本質は、團體による、その成員の送行にある。とすれば、對者に對する勸勵の言辭も、その團體の倫理に拘束されることになる。「男兒爭富貴」という、傍若無人の上昇志向は、官僚組織の中にあっては秩序の破壞として忌避されるべきものであろう。しかしこのとき宋中の野人であった高適には、こうした倫理的拘束はそもそも無かった。つまりこの鼓舞の言辭は、官僚世界の秩序の外部にある者にして可能な、戰國時代の遊說の士を氣取った大言壯語と見るのが實態に近いであろう。――宋中の地に沈淪していた不遇の高適が、好んで自らを落魄の遊說家＝蘇秦に擬えていたことは、先に讀んだ「別韋參軍」の「歸來洛陽無負郭、東過梁宋非吾土」に至る前半において知ることができる。この時期の高適が切望していたのは、官僚の階梯を一段ずつ登るような堅實な立身出世ではなく、壯士の氣魄を負って、一氣に榮華の高みに拔きん出ることだった。(14)

この詩が「送～」詩とはならなかった積極的な理由は、二つあるだろう。第一は、劉某の過去の經歷を丹念に書き綴ることである。「送～」詩の典型的な樣式では、被送者の過去が捨象されていることと、確かに徑庭がある。

そして第二は、その經歷の內容、そのものの特徵である。劉某は英邁な資質に惠まれながら、久しく不遇の狀態に捨て置かれた。しかし彼は最後には、天子の異例の拔擢を受けて、その不遇の過去を一蹴する。「幾載困常調、一朝時運催。白身謁明主、待詔登雲臺」。劉某の經歷は、順調な上昇線を描く選良のそれではない。天子との會遇に由って一氣に起身を逐げる、それは今は不遇に淪む高適が、自分の未來に期待する起身の仕方そのものだったと言えるであろう。高適は彼の經歷の中に、自らの願望を重ね合わせていたのであり、この意味で、彼は單なる尋常一般の知人として措定されているのではない。――こうした理解は、「相逢梁宋間、與我醉蒿萊」の詩句によって裏面からも確認できる。この詩句は、蒿萊の中に屏居する高適が、自らを不遇と認識していることを先ず表明する。そして劉某は、高適の不遇を知りながら、なおもその人を慕ってあえて蒿萊の中に高適を尋ねる人物とし

て提示されるのである。高適が劉某の中に自分の起身の願望を重ねたように、劉某もまた、高適の中に自分と同質のもの（沈淪の壯士）を認めて訪ねたのである。

「別～」詩は、對等の關係に結ばれた個人と個人との離別（端的には惜別）を主題とする。この詩が示す以上の特徴は、いずれも「送～」詩のものではなく、惜別の思いを綴る「別～」詩のものであることを確認させるものである。

高適の「別～」詩では、最後に、李攀龍『唐詩選』にも採られて有名な作品を讀んでおきたい。

別董大二首　高適

十里黃雲白日曛　北風吹雁雪紛紛　莫愁前路無知己
天下誰人不識君

六翮飄颻私自憐　一離京洛十餘年　丈夫貧賤應未足
今日相逢無酒錢

この詩が「別～」の命題を採ることについて、必要な確認をすれば、①詩題に送られる董大の目的地點も、目的行爲も記されておらず、また、②董大の旅の道程の描寫「沿路の敍景」が存在しない（もっとも沿路の敍景が典型的に運用されるのは五言律詩型の「送～」詩であり、必ずしも絶句ではないのだか）。この二點は、この詩が「送～」詩とは一線を畫していることを證すものである。

しかしここで何よりも注目したいのは、其二が、高適自身の境遇について專ら語る、この點である。

六翮飄颻私自憐　一離京洛十餘年
丈夫貧賤應未足　今日相逢無酒錢

六翮　飄颻して　私（ひそ）かに自ら憐れむ
一たび京洛を離れて　十餘年
丈夫は貧賤　應に未だ足らざるべし
今日　相ひ逢ひて酒錢無し

大鳥（高適）は、風のままにただようばかりで、己れの不甲斐なさを悲しんでいる。京洛の地を後にして、もう十年も經った。しかし丈夫たるもの、この程度の貧賤は試錬とわきまえ、へこたれてはならないものらしい。今日、君に逢ったというのに、酒を振舞う金すらもないのだ。――高適は、二十歳の頃に長安に上ったが、失意のままに離京して宋中に客寓の生活を始める。高適がこの詩を作ったのは、それから十餘年の後、なお宋中に屏居を續けていた時期である。高適は、

自らを「六翮」「丈夫」と稱して、高く矜恃している。しかし實際は、六翮はいたずらに飄颻し、丈夫は酒錢にも事缺くほどに貧賤の境遇に沈淪している。このような境遇を作者自身が物語ることは、送行（送り出し）を主題とする「送～」詩の様式には、そもそも場違いのものである。この一事をとっても、この詩が惜別（殘留）を主題とする「別～」詩として作られていることは、明瞭である。

この「別董大二首」の順序は、版本によって異なっている。(15)「十里黄雲」で始まる詩が突出して有名ではあるが、離別の詩の作法から見れば、むしろ自己の境遇を敍べる「六翮飄颻」の詩が前提となるべきだろう。この順序の混亂は、この詩が惜別の情を綴るべき「別～」詩として作られたことの意味を、改めて確認させる興味深い事實と、位置づけなければなるまい。

高適が、如何なる理由で、送別の場面で當時の主流であった「送～」詩ばかりではなく、あえて併せて「別～」詩をも制作したのか。

この點については、二つの要因を考えることができるだろう。第一は、高適の文學制作が高潮にあった宋中屏居を中心とする仕官以前の時期、かれの周圍には「送～」詩を制作する環境がそもそも十分に用意されていなかったことを、指摘すべきであろう。「送～」詩は、團體が、團體の成員を送行する様式である。官人であれば、彼の屬する官僚組織がその團體となり、在野の名士（孟浩然）であれば、在地の名望家たちがその團體となった。しかし宋中に客寓の生活を送っていた高適には、自己の屬する團體はなかった。彼が頻りに周圍の冷眼を嫌い、知己の不在を嘆き、自身の孤獨を訴える境遇にあったことは、この時期の高適が「送～」詩の制作の場から遠く隔てられていたことを意味している。高適は、こうした境遇の中で、自らに相應しい離別詩の様式として、送別の「別～」詩を開拓したのである。

第二に、盛唐後期において次第に進行する様式化が、「送～」詩から自由な抒情を閉め出して、千篇一律の隘路へと導きつつあった。この「送～」詩の弊害は、何人かの詩人たちによって氣付かれていたであろう。高適は、そのことに氣付いた初期の詩人の一人であり、しかもその弊害に對する代案を「別～」詩の制作を通して具體的に提起した詩人となったのである。

結語

高適の「別～」系の送別詩の存在は、その中にすぐれた作品を含むことによって、それ自體が文學史上に意味を持つものである。と同時に高適のこれらの作品は、送別の文學は、「送～」系の作品とは性格を異にする「別～」系の作品と相俟って、より多面的な世界を構築できることを示すものである。

「送～」詩は、團體が（複數の個人が共に一つの團體の成員であるという自覺の下に）、その成員の一人を送行する詩である。このような「送～」詩では、送る側も、送られる側も、團體の成員の資格において互いに關わるのであり、作品は個人に屬する感情を交えずに構成される點で、その抒情の性格も自ずと制約されることになる。「送～」詩が樣式的特徴とする「沿路の敍景」と「豫定された營爲への勸勵」とは、正しくそうような制約の下におかれた抒情のあり方を示したものである。

これに對して「別～」詩は、あくまでも個人と個人の關係において作られる。「別～」詩の主題は、離別における作者自身の感慨の表白でなければならず、逆言すれば、このとき作者は、個人とは次元を異にする團體の成員としての意識を拂拭していなければならない。對者が未來において如何なる營爲を豫定しているかと言うことは、主要には團體の關心事であり、從って「別～」詩では問題にされないのである。このような性格を持った送別における「別～」詩は、高適において突如出現したのではない。近い過去には、張說の先例があった。そして遠くは、六朝期の「別～」詩の傳統を繼承するものである。それはまだ送別と留別との未分化の段階に留まりながら、だからこそ送者と被送者との視點の相違を捨象して、ひたすらに關心を、今という離別の事件に集中する樣式だった。高適はこうした六朝期の「別～」詩に立ち戻ることで、「送行」ではなく「惜別」を主題とする送別の文學を再構築したのである。

しかしながら、送別の文學は大勢として見れば、盛唐から大曆時期にかけて「送～」系の送別詩によって獨占されていた。そして元和以降、送別詩が急速に制作數を減らしたことは、この「送～」系の送別詩の樣式的な單一性が、單調な文學を生んで、ついに詩人たちの興味を繫ぎ止められたくなったことと對應している。こうして高適の「別～」詩の試みは、繼承者を持つことなく彼一人のものとして完結したが、この

ことが提起した問題は、その後の中唐期の文學の展開を考察するための貴重な觀點となりうるものである。

［注］

（1）参照：拙稿「六朝期における離別詩の形成（下）の二――初唐四傑による「送序」の創出をめぐって」第二一節（『中國詩文論叢』第12集、一九九三年）

（2）盛唐時期に「留別～」詩を最も多く制作したのは、孟浩然に稍や遅れる李白（一七首）であり、數においてこれに次ぐ詩人が孟浩然と王昌齡（共に五首）、そして杜甫の四首、王維の三首が續く。要するに、送別と、成熟した留別の間にあって、「別～」詩が獨自の地位を主張できる環境が整うのは、この孟浩然以後としてよい。これ以前の「別～」は、時に送別の詩となり（張說）、時に留別の詩となるばかりで（陳子昂）、高適の場合のように「送～」「留別～」に對して獨自の主張をもつ命題となるには、未だ條件が成熟していなかったのである。――なお注（1）所掲の拙稿を參照。

（3）著名人に送別の詩を贈られることは、榮譽なことである。時代は下るが、大曆年間に地方に赴任する者は、錢起や郎士元の送別詩を得られないと面目を失うことになったと傳えられる（高仲武『中興閒氣集』郎士元の條）。これと同樣のことは、張說の場合にもあったと考えて良い。しかも張說は、詞臣の錢起・郎士元とは異なり、文壇のみならず官界の重鎮でもあった。

（4）なお念のために補足する。一例として「南中送北使二首」其一：「傳聞合浦葉、曾向洛陽飛。何日南風至、還隨北使歸。紅顏渡嶺歇、白首對秋衰。高歌何由見、層堂不可違。誰憐炎海曲、淚盡血沾衣」を取り上げれば、そこには個人に關わる貶謫の悲哀が抒べられて、「權威ある者」に相應しい權威を見ることはできない。しかしこの時の張說は、個人としてではなく、あくまでも南中の地の地方長官の職務において「北使」（固有名詞をもって特定されない誰か）を接見し、その職務の一環として彼を國都へと送り出すのである。「送～」詩が作られる契機が何であるか、明瞭である。

（5）孟浩然が鄉里の襄陽にあって、地方官の轉任を送行する宴席に官人「衣冠」や土地の名士「耆舊」と共に連なって「送～」詩を制作していたことは、次の作例によって知られる。「送韓使君除洪州都曹（韓公父常爲襄州使）」：「述職撫荊衡、分符襲寵榮。往來看擁傳、前後賴專城。勿翦棠猶在、波澄水更清。重推江漢理、旋改豫章行。召父多遺愛、羊公有令名。衣冠列祖道、耆舊擁前旌。峴首晨風送、江陵夜火迎。無才慚孺子、千里愧同聲」。自注「韓公父常爲襄州使」に據れば、韓朝宗の父（韓思復）も、かつて襄州刺史に任ぜられた。

（6）参照：拙稿「六朝期における離別詩の形成（下の三）――盛唐期の臺閣詩人と送別詩の確立」（『中國詩文論叢』第十四

集、一九九五年）

（7）参照：注（6）所掲の拙稿。

（8）高適の三二首の「送～」詩で、詩題中に目的地點ないしは目的行爲を明記するものは、以下の二一首：①送蕭十八與房侍御迴還　②送崔錄事赴宣城　③送虞城劉明府謁魏郡苗太守　④送楊山人歸嵩陽　⑤送渾將軍出塞　⑥送田少府貶蒼梧　⑦送郭處士往萊蕪兼寄苟山人　⑧送白少府送兵之隴右　⑨送張瑤貶五谿尉　⑩送蔡十二之海上（時在衞中）　⑪淇上送韋司倉往滑臺　⑫送崔功曹赴越　⑬送蹇秀才赴臨洮　⑭送劉評事充朔方判官賦得征馬嘶　⑮送鄭侍御謫閩中　⑯送李侍御赴安西　⑰送裴別將之安西　⑱送李少府貶峽中王少府貶長沙　⑲送柴司戶充劉卿判官之嶺外　⑳送蔡少府赴登州推事　㉑秦中送李九赴越。

一方これに對して、詩題中に目的を示さないものは、以下の十一首：㉒宋中送族姪式顏（時張大夫貶括州、使人召式顏、逐有此作。）　㉓又送族姪式顏　㉔送韓九　㉕送別　㉖送蔡山人　㉗賦得還山吟送沈四山人　㉘河西送李十七　㉙送魏八　㉚送董判官　㉛送桂陽孝廉　㉜送李少府時在客舍作。――このうち㉒㉓は族弟の高式顏を送別したものであるが、前者に付けられた自注に據れば、括州刺史に貶謫された張守珪に招かれて、高式顏がその地に赴くときの作と明示している。從って、この二篇は、目的地點と目的任務を記した作品として分類するのが妥當であろう。

送別における「送」と「別」―高適送別詩論考（松原）

（9）西域に人を送る「送～」詩では、次の王維の詩が知られている。「送平澹然判官」：「不識陽關路、新從定遠侯。黃雲斷春色、畫角起邊愁。瀚海經年到、交河出塞流。須令外國使、知飲月氏頭」。「送劉司直赴安西」：「絕域陽關道、胡沙與塞塵。三春時有雁、萬里少行人。苜蓿隨天馬、葡萄逐漢臣。當令外國懼、不敢覓和親」。五言律詩の採用と共に、沙漠の荒漠とした光景の描出に力點を置くことも、また建功への期待を末尾に形式的に添えることも、高適の詩と同工異曲である。

（10）西晉の張翰の逸話を踏まえる。張翰、晉吳郡人。性縱任不拘、離家入洛、被齊王冏徵辟爲官、見秋風起、因思吳中菰菜・蓴羹・鱸魚膾、曰：「人世貴得適志、何能羈宦數千里以要名爵乎」。遂命駕而歸。（『晉書』文苑傳）。なお高適は、少年の時、父の高從文が韶州（廣東省韶關市）長史となるのに伴われて、嶺南に行った。この前後、吳中を經過したのであろう。

（11）劉開揚『高適詩集編年箋註』（中華書局、一九八一年）の編年に據れば、①④⑤⑧⑨⑫を略ぼ天寶十一、二載の制作とする。その他については、⑬を宋中時期、⑪を安史の亂後、②③⑥⑦⑩⑭を制作時未詳とする。また周勛初『高適年譜』（上海古籍出版社、一九八〇年）では、①②③④⑤⑭を天寶十二～十四載、⑧⑨⑬を乾元元、二年に繫年する。

（12）六朝時代の離別詩は、送別・留別のいずれの場合にも「別」の命題が一般に用いられた。このことが示すように、そもそも「別～」詩は、誰が送者で被送者であるかという立場の相

違、要するに送別と留別との視點の相違を超越するものであり、それだけに關心を離別（分離）という事件そのものに集中する樣式であった。この意味で、高適の「別～」詩は、六朝時代の「別～」詩の全き延長上にあり、その性格を「送～」詩との相違を際立てながら、發展させたものである。

(13) 孫欽善『高適集校注』には「寒楚」の「楚」を楚州（江蘇省淮河以南）と見て、劉某の赴任地としているが、無理がある。ここでは劉開揚『高適詩集編年箋注』六六頁にもあるように、「寒楚」は「雪天」と對になって、冷え冷えとして楚（イバラ）の廣がる曠野を言うであろう。

(14) 高適が、天寶八載（七四九）、四九歳にしてようやく手に入れた封丘縣尉の微官をやがて擲ち、その後、隴右節度使哥舒翰の幕僚となって俄に頭角を露して行く過程は、彼自身が早年に思い描いた壯士＝遊說家の起身の仕方の、唐代における再現である。なお高適が蘇秦の榮達を夢見ていたことは、一例として「別王徹」詩の末尾に見える王徹に手向けた言辭「離別未足悲、辛勤當自任。吾知十年後、季子（蘇秦の字）多黃金」にも窺える。

(15) 劉開揚『高適詩集編年箋註』、孫欽善『高適集校注』が指摘するように、唐鈔本『唐詩選』殘卷・宋鈔本『高常侍集』、四庫全書本『高常侍集』では、「六翮…」の詩が其一に置かれている。

【附記】本稿は、平成十二年度專修大學研究助成（個別研究）の研究成果の一部である。